平成３０年７月３日（火）第２回農山漁村コミュニティ・ビジネスセミナー結果

【農業で食えなかった村が生き残る手立てとしてとったのは『ほっとステイ事業』】

㈱信州せいしゅん村　代表取締役　小林　一郎　氏（長野県　上田市）

ありのままの農山漁村生活の体験とは一体何か？どうしてその考えに行きついたのか？そのことで農山漁村はどうなるのか？「ほっとステイ事業」と農山漁村の現状とあるべき姿を目指して闘う、小林むらおさの取り組みを通して農業及び農山漁村が持っている潜在能力が未来の日本に必要不可欠な「こころ」の問題への解決策になるのではないか。都市と農山漁村の交流の本当の意味について考えることができたのではないかと思いました。

■せいしゅん村とは

農業が不振になったから諦めるのではなく、地域の可能性を信じて、仲間とともに【前例のないことを独創的に】をモットーにして数々の事業を企画立案実現している長野県上田市の株式会社信州せいしゅん村は、農村のありのままの暮らしを体験する（農作業・自然散策・家庭生活を一緒に行う）『ほっとステイ事業』により農村地域の活性化を図り、新しい形の農村の魅力を創出しています。

2006 年からは海外からの農村体験ホームステイ(以下 HS という）受入を開始。特に台湾からの訪日学生の半数近くの 2,000 人弱を HS で受入れ、世界 20 か国から大人や子供・家族を受け入れていれるなど、全国の農村と同じ課題を抱えつつも農村の生き残りを国際的な視野で考え続けています。

信　州せいしゅん村の活動の拠点施設「農家レストラン里の食」や「G ファーム」は、単に農村地域の活性化に止まらず、近年地域の人々がふらっと立ち寄れることで、孤独化を防ぎ、集まった人がほっとできる場所、ワクワクできる場所である「地域の居場所」として全国で開設されている「コミュニティカフェ」の役割としても、社会教育や福祉の面でも優れた取り組みであると考えられます。

1998 年地域住民 7 人が農村活性化を目的に集まり、2002 年から農村のありのままの暮らしを体験する（農作業・自然散策・家庭生活を一緒に行う）『ほっとステイ事業』を展開しています。2006

平成３０年７月３日（火）第２回農山漁村コミュニティ・ビジネスセミナー結果

年からは海外からの農村体験ホームステイ(以下 HS という）受入を開始。特に台湾からの訪日学生の半数近くの 2,000 人弱を HS で受入れ、世界 20 か国から大人や子供・家族を受け入れています。ほっとステイ体験料は、せいしゅん村が一括徴収し各農家に小林さんは、手渡しで届けています。振込ならば便利ですが、農家に届けることで意見や声を聴くこともできるし、今後に向けての情報交換ができるので、それぞれの農家に足を運ぶのは止められないと言います。

■トマトの産地から農業のある風景をサービスに転換

長野県上田市武石地区は、かつてはトマト露地栽培が盛んな地域でしたが、ハウス栽培や農産物の輸入拡大により農業経営が厳しくなり、過疎化、地域の疲弊が進んでいきました。この状況に危機感を覚えた代表の小林一郎氏は、農村の生き残りを考えるために友人に呼び掛け、誰でも自由に意見が言える情報交換・勉強会「のうのうの会」を 1998 年 10 月に発足させ現在も毎月 1 回開催しています。「のうのう会」で皆と語り合うなかで村を活性化させるには、農業だけでなく、「外から来てもらえる事で成り立つサービス提供型の農村を目指す」という方向性が出され、自分で蒔いて・育てて・採って・調理してこだわりを食すオーナー制度「我家我家(ｶﾞ ﾔｶﾞ ﾔ)ファーム」を 1999 年に開始しました。

続いて 2000 年には任意団体「信州せいしゅん村」の発足と、ボランティア組織を立ち上げ耕作放棄された田畑や手入れが出来ない山を復畑（そばを栽培）する「せいしゅん村開拓団」、さらに「秘伝たけし流 10 割そば道場」を始めました。その後も信州せいしゅん村は、【前例のないことを独創的に】をモットーにして数々の事業を企画立案実現しています。さらに、近隣の立科町・茅野市を始め県下 7 地区で展開している長野県ほっとステイ協会を設立し広域地域振興として取り組み、全域の年間受入者数は約 2 万人となっています。　拠点施設「農家レストラン里の食」や「G ファーム」を営業しつつ、信州大学、県立病院と農村の癒し効果についての実証にも取り組むなど、農村地域を守るために都市生活者や企業とも事業を展開しています。この活動が評価され第 15 回オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）を受賞しました。2018 年 7 月 3 日(火）農山漁村コミュニティ・ビジネスセミナーにて。

1

《信州せいしゅん村》の活動

農業で食えなかった村が生き残る手立て
としてとったのは『ほっとステイ事業』

あと10年経ったら誰が畑にいますか？
あと15年経ったら誰が田にいますか？
あと20年経ったら隣に人がいますか？

新しい事業！
何を考え、どうやったか？
～信州せいしゅん村活動事例～

8

これからの農業

経緯・想い

TPP⇒世界中を相手の価格戦争

専業だけが優遇される⇒でも兼業農家は存在

日本人の選択

農業は120万戸が生産
車は8社が生産
農業の総産出額**8兆7,979億円**

日産自動車1社だけで＝総生産額5**兆6,525億円**

『1.5%のために98.5%は死ねない』

農業がない⇒農村と呼べない・・・教科書に無い言葉

農業は無くならない**⇒兼業が“農村”を守る**

9

これからの農村

参加人

“のうのうの会”⇒情報共有、検討の結果

・出荷用農業生産は専業農家に任せる（農業で生きて）
・市場出荷で成り立たない農業者

今後の農村は両者の存在で存続を図る

来て貰うことで成り立つ農村！
【サービス提供型農村】になろう

特化した活動を展開しよう⇒信州せいしゅん村の発足

11

従来型活動を見直す

参加人

虎やライオンが集まらないとダメ

（行政手法の羊100匹ではダメ）

・志が同じ人が集まる
・判断基準が同じ
・先に立つ人：パソコン使えなければはダメ
・先に立つ人：行政主体ではダメ
・先に立つ人：当て職ではダメ

行政は作って終わり
トイレ・駐車場・協議会
民間は作ってからがスタート

14

来て貰うには！

受入内容

農村には農業以外に素材がある！

人・暮らし・環境・風俗・
習慣・他産業＆農業etc.

⇒ これを活用

・従来型グリーンツーリズムは
農業という産業だけを使った。

・今は“農泊地域”と云う

農村とは“農業が主体的に行われる地域のこと

15

≪ほっとステイ≫

受入内容

①来て貰う人から収入を得る
②田舎の良さで惹きつける

【ほっとステイ】・・・日帰り農村体験

無理をしない受入
　特別な事（非日常）はしない。
日々の当たり前の生活の中に迎え入れ、
　一緒に過ごす。
　　午前中は主に農作業
　　午後は周辺散策で自然体験
入村式はやらない⇒自宅で迎え入れ
昼食は持参して貰う→飲食店許可不要
　お茶・味噌汁・漬物を一緒に作る
　来た人と一緒に用意・片付け

16

ほっとステイ 受入れ実績

受入内容

日帰り体験

【国内の受入】

2002年　1,557人
2003年　2,415人
2004年　3,452人
2005年　5,703人
2006年　6,936人
……
以下、受入地域/順次拡大
2014年【10,500人】
2015年【15,435人】
2016年【19,846人】

ホームステイ

【海外受入】

2006年 初　16人
……
2015年　1.797人
2016年　1.987人
2017年　2.232人

農村体験経済波及効果⇒国内：4万泊+海外：2千泊

22

経営は営業ない！

組織・体制

幾ら”イイモノ”でも営業しなければ売れない！

誰が動くか⇒自分が動く
　同級会の幹事を見ろ
　トヨタだって営業している

ターゲットは？
　誰に、何を、どの様に、
　・売りやすい商品
　・買って貰える商品を作る

≪積極的に営業活動しないと業績は上がらない≫

28

本気で本当にやりますか

民泊・農泊

プログラム、作って終わりではない

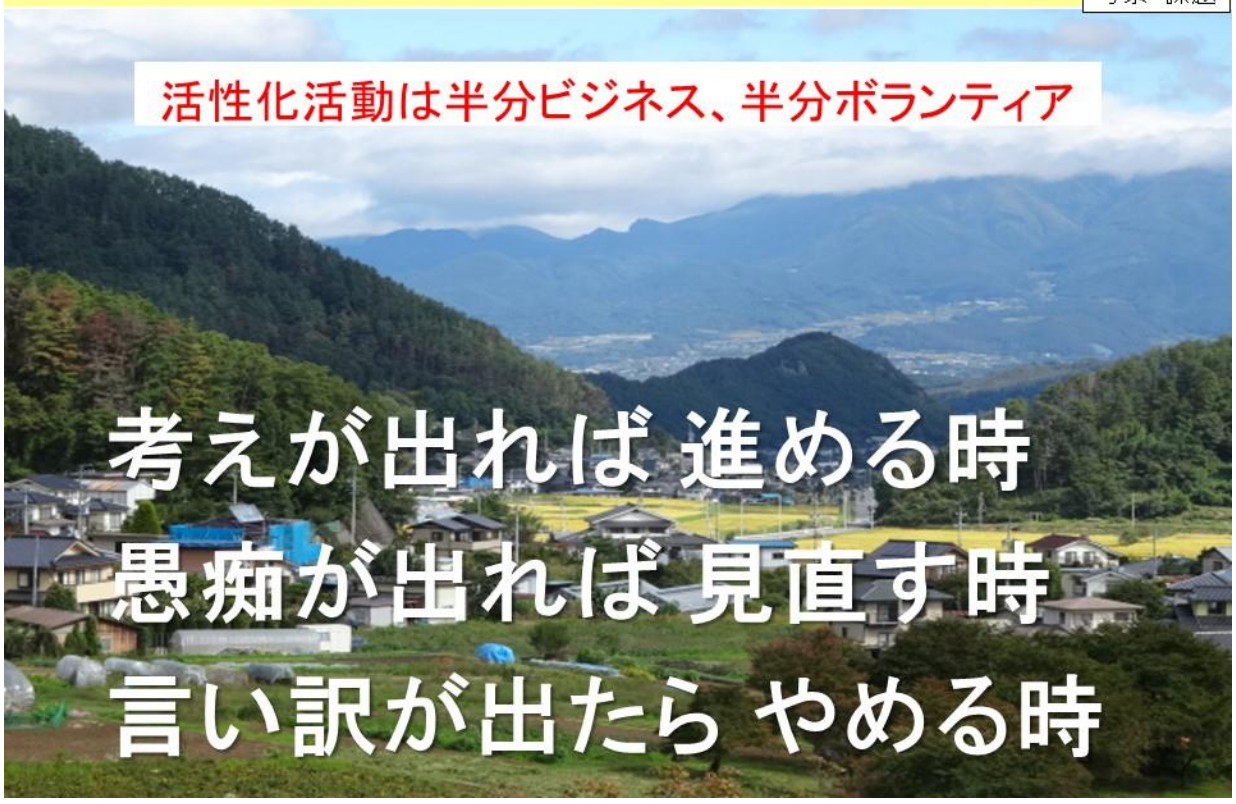
1. 誰もが何とかしなければと思う
2. 誰もが組織を作ろうと云う
3. そして組織を立ち上げ＆箱を作る
4. これで活性化が出来る！
5. ダメ⇒石の上にも3年⇒ダメ

大事なのは 志向と行動

学んでいればいつか学者になれる
（明治維新：吉田松陰）

やるか！やらないか、だけ。
本気⇒【覚悟】の問題

31

活性化事業とは

考察・課題